**駄菓子屋のおばあちゃん**

　まだ私がずいぶん小さい頃、駄菓子屋のおばあちゃんに会うために、古く小さな駄菓子屋へ乗れるようになったばっかりの自転車を一生懸命に漕ぎ、顔を出していました。

　ある日、おばあちゃんに手紙を書いて、また自転車を走らせました。その日から顔を出すたび、「手紙毎日読んでいるのよ」と嬉しそうな笑顔で話してくれました。

　小さい頃の私にとって、あの優しいまなざしや最後まで楽しそうにお話を聞いて笑ってくれる存在が、もう一人のおばあちゃんのように感じられたのかもしれません。

　中学に入ってから忙しくなり、駄菓子屋の存在すら忘れてしまっていました。でもタンスを掃除していた時、一通の手紙を見つけました。駄菓子屋のおばあちゃんからでした。当時は読めなかった、昭和書体の長い手紙。

　私も毎日読んでいます。ありがとう。

応募時（静岡県中学三年）　　佐藤　陽菜